

モンゴルの人々

— 首都大学東京 地理学教室 根本 学 —

2003年10月に初めてモンゴルを訪れて以来、数回モンゴル国に渡航する機会に恵まれた。本稿には、私が渡蒙時に現地で出会ったモンゴル人について、とくに印象深かった出来事の一部をまとめた。私の渡蒙はすべて大学での研究調査（モンゴル草原の気候について調べている）に関するもので、これまでにモンゴル国内で訪れた場所は、首都ウランバートルと、調査地点のバヤンウンジュール村（ウランバートルから南西に約130km）のみである。あらかじめ偏ったモンゴル滞在経験に基づくものであることをご了承願いたい。

バヤンウンジュール滞在

2004年6月から7月にかけての滞在が一番長く、丸5週間をレンタルしたゲル（遊牧民のテント）にて過ごした。その間、便宜をはかってもらっていた気象観測所職員や警察官をはじめ、何人かの訪問者がいた。なんとなく直せそうだということで壊れた電気製品をもって見せに来る人、夜中に泥酔して倒れながらにやってくる人、遠まわしにタバコをねだりにやってくる人、駱駝の群れを連れて南の砂漠からウランバートルに向かう人などである。後で知ったが、知らない人の家でも気軽に訪問し、逆に知らない人でも迎え入れてもてなすのがモンゴル人気質のようだ。



バヤンウンジュール村の集落（北東の丘より撮影）

バヤンウンジュール村には木製の塙で囲まれた平屋建ての住宅街がある。つまりここには固定した家を持つ人がいる。しかし、彼らは遊牧生活を

完全に捨ててはいない。現地滞在中に何度もお世話になった気象観測所観測員のNさんの家では、馬や牛を所有しており、日中は近くの草原に出て家畜に草を食べさせていた。少し離れた草原にゲルも持っていた。Nさんは銀行員も掛け持ちでやっており、働きものである。気象観測所の所長さんの家でも、ガソリンスタンドを経営していた。彼女らの家庭がここに住む人々の生活を代表しているかどうかはわからないが、これまで行ってきた遊牧も続けながら村における仕事を掛け持つ形で生活は、兼業農家ならぬ「兼業遊牧家」と呼べるのではなかろうか。



塙の内側。奥に見えるのが家。青年たちは暴れた馬を押しさえつけるのに成功したところ。

モンゴル国に行くようになってから、初めて日本の大相撲に興味を持つようになった。多くのモンゴル人が日本の大相撲に興味を持っていて、日本人力士の名前や決まり手をよく知っている。何故彼らが詳しいかといえば、モンゴル国ではモンゴル語の同時通訳付で本場所が生中継されているからである。モンゴル国出身で横綱の朝青龍が当然一番人気かと思っていたが、強いけど生意気だという意見を聞いた（2004年7月当時）。なぜか高見盛の人气が高かった。このような相撲人気のおかげで、我々の調査で現地の人をアルバイトに雇うとき、大相撲の本場所開催期間中の午後4～6時頃に作業を入れると彼らの機嫌が少し悪かった。

2004年6月にはモンゴル国の総選挙があった。

選挙活動が行われている期間はほぼ毎晩、村に1つある小学校の体育館でダンスパーティーやバンドの演奏が行われ、その大音量が遠くまで響きわたっていた。これは支持者ごとに選挙演説などを行った後で、有権者の歓心を買うために行われるそうである。幾日か体育館の様子を見に行ったら、とくに印象に残ったのが歌手の演奏で、歌手がステージに上がるときにレコード盤をもって来て、DJ風の人に手渡す。このレコードには歌の伴奏のみ（つまりカラオケバージョン）が入っていて、これにあわせて歌手が歌を歌うのである（なかには生バンドによる伴奏もあった）。ダンスは、ディスコ風に踊りまわるときもあれば、いわゆる社交ダンスのときもあった。皆上手である。ダンスパーティーは深夜0時か1時くらいまで続くが、大人から子どもまで多くの人が集まっていて、村人の多くが楽しみにしているようであった。

ウランバートル滞在

2003年10月に初めてモンゴル国を訪れたとき、ウランバートルのモンゴル人家庭にホームステイした。引き受けてくれた家庭は、夫妻とお祖母さん1人の3人暮らしであった。息子がアメリカに留学しており、部屋が空いていたのでその部屋を使わせてもらった。旦那さんは政府の役人で、奥さんも福祉施設で働いていて、共働きであった。旦那さんは朝8時に出勤しおおよそ夜7～8時くらいに帰宅したが、たまに9時くらいになることもあった。一方奥さんのほうは、少し離れた郡や村での仕事をしていたので、一度仕事にでると2～3日帰ってこないことがあった。「モンゴル人の生活も日本と変わらず忙しいのだなあ」とモンゴルに来て間もない頃だったのでそう思っていたが、後でよく考え直すとわずかな食費だけで私を引き入れてくれた彼らは中～上流階級だったのである。旦那さんはロシアのイルクーツクの大学を卒業していたし、奥さんは英語が上手であった。

モンゴル国では1990年代初頭の市場経済化以降都市に移住する人が増えたが、現在は失業者も多く、治安の悪化とともにストリートチルドレンの

増加などが社会問題となっている。実際に市場でスリの集団にもあったことがあったし、何度か子どもに物乞いされて困ったこともあった。



南の丘から見たウランバートル市の中心部

大学を卒業しても就職できない若者にも会う機会もあった。我々の調査をいつも手伝ってくれるBさんは、経済学部を卒業したが就職先が見つからず、ここ数年夏は我々の調査を手伝い、冬はウランバートルで様々なアルバイトをしている。彼の友人の1人は昔体育の先生をやっていたが私が会ったときは失業中で、その後乗り合いバスの運転手になった。また別の友人は、町の集中暖房の管理業務を行っていたが、現在は韓国に出稼ぎに行ったそうだ。ある日、調査につかう資料の買出し中のちょっとした待ち時間、電話屋さん（街中で白い電話機を持った人のことで沢山いる。数百トゥグリクで電話を掛けさせてくれる）に英語で話しかけられた。彼女は、大学を卒業したが就職できないので、仕方なくこの仕事をやっているといっていた。失業率が20%を超えともいわれる社会生活は、こういうものかとおぼろげに感じた。

おわりに

短い期間における調査の傍らではあったが、モンゴル国の都市と村の両方で、現地の人の生活の一部にふれることができた。人々の生活が豊かになるはずだった市場経済化は、万人にとって上手く進んでいないように感じる。加えて近年は、土地所有法の施行が、モンゴルの遊牧にさまざまな影響を与えることが懸念されている。今後、伝統的な遊牧の存続を含めてモンゴル国がどのように発展していくのか、見守りたい。